

論 文

現代社会と真宗教義

——異文化間教育とのかかわりの中で——

永久欣也

はじめに

世界中を戦争の渦に巻き込んだ、第二次世界大戦が終焉してから、まもなく六〇年になろうとしている。その間にも、朝鮮戦争やベトナム戦争、最近の湾岸戦争やイラクへの攻撃など、一向に世界が安住の地に留まることはなく、混沌とした時代が続いている。

わが国にあっても、七〇年代前半のオイルショックを契機としての金融不安や輸出入の低迷。八〇年代後半からのバブルの崩壊。このバブルの崩壊の後遺症が今なお日本経済に暗い影を落としている。そして、さらに輪をかけたように阪神・淡路大震災や、先の新潟・中越大地震の勃発、自然災害による洪水や山崩れなど、暗い話題の連続である。これは、親鸞聖人が生きた時代と似通っていると言えるのではなからうか。

親鸞聖人がお生まれになったのは、承安三年（一一七三年）の四月一日、太陽暦では五月二一日のことであるが、それは、平安時代の末期であり、それまでの藤原氏の栄華もすたれ、源平の戦いや飢饉、地震などによって治安の乱

れが悪化していった頃でもある。九歳で出家され、比叡山での修行の後、次に山を下りられた時にはすでに鎌倉時代へと入っているのであるが、鎌倉時代は、仏教でいう末法思想の到来の時代でもある。そして、その鎌倉時代には数多くの新しい仏教宗派が生まれてくるわけであるが、親鸞聖人を開祖とする真宗の教えは、現在にも十分生かされる教えであり、最近、アメリカなどを中心に親鸞聖人の教えが見直されてきていることは意義深いことである。

親鸞聖人が目指したものは、ただひたすらに阿弥陀仏の救いを信じ、誰もが極楽浄土へと往生できるという、平等の思想であり、老若男女、上下貴賤の区別ない世界を築きあげることであったが、この思想は、現代社会におけるグロバリゼーションの考えと相通するものでもある。鎌倉時代という、封建社会にあつて、人間解放に力を尽くした親鸞聖人の教えが、現代に生きているのは当然のことと言えるのである。

現代社会にあつては、ごく一部の仏教宗派を除き、僧侶の妻帯はあたりまえのようになってはいるが、これとて、親鸞聖人によって先鞭をつけられたものである。当時としては旧仏教勢力によって非難され、僧侶としての身分までも剝奪されたわけであるが、その旧仏教界の多くも現在では右に倣えである。そして、そのことが親鸞聖人をして「非僧、非俗」と言わしめし、底辺での生活をしてきた人々の立場にたつた僧侶がその時生まれたのである。

親鸞聖人の教えの中心は、阿弥陀様の慈悲の下に、「人」と「人」のかかわりを大切にすることであり、「他者」によって自分がかかわれていることを感謝することでもある。それぞれが持つ自分自身の文化を認め合い、お互いに助け合っていく教え、それは私自身の研究テーマでもある異文化間教育ともかかわっている。この論文においても、現代社会における親鸞聖人の教えを、異文化間教育研究の観点から見ていくことにしているが、本来、宗教とは「人」と「人」とのかかわりから出発すべきものである。自由で平等の思想。差別からの解放。それを実践してきたのが親鸞聖人なのである。

一 平等の思想と親鸞聖人

私自身は、現在、小学校の教員であるとともに、浄土真宗本願寺派（西本願寺）の僧籍を持つ者でもある。そして、浄土真宗の開祖、親鸞聖人の教えに、日々生かされている者でもあるが、仏教の教えは、最近はやりの、グローバルゼーションの流れにも対応できるものでもある。

外国の人々と親しくなり、食事の席などを同じくすると、話題となるのは日本の生活や文化、政治や社会といったことは勿論のことではあるが、同時に彼らがより以上に興味を示すものが日本の宗教というものである。

外国の多くは、国家宗教があり、個人の宗教があるが、その大半は唯一絶対の神の立場でもある。しかし、日本の場合には、仏教があり、神道があり、古くからの土着宗教があり、新興宗教がある。そして、外国からの諸宗教もある。まさに、二重、三重といった重層信仰である。唯一絶対の神を信ずる外国の人々にとって、日本人のこの姿は奇異でもあり、理解に苦しむところのものであるが、やはり、日本人の生活の根底にあるものは仏教の教えなのではなからうか。

ここ数年、世界のあちらこちらで、内紛と呼ばれている戦争が行われてきたが、それらのほとんどは民族戦争や宗教戦争である。キリスト教世界とイスラム教世界の対立。あるいは同じキリスト教でありながら、カトリックとプロテスタントの争いなど、旧約聖書の時代からの遺恨戦争でもあるが、キリスト教であれ、イスラム教であれ、その説くところは神の愛であり、全同胞の救いへの道である。全人類の平和を強く願っているところもまた同じである。

浄土真宗の開祖、親鸞聖人の教えの中に、「一切の有性はみなもって世々生々の父母兄弟なり。」⁽¹⁾という一文があるが、生きとし生けるものすべてが平等であるという教えは、恒久の世界平和のために必要不可欠な教えでもある。

キリスト教も、イスラム教も、仏教も、その教えるところは人類の自由と平等と平和である。しかしながら、その平等の思想すら、西洋的な見方からすれば神の創造物としての狭い枠の中の平等であり、決して神にはなれない平等観である。

それに対し、仏教的な見方からすれば、生きとし生けるもの全てが同一のものとして平等であり、仏にもなりうる仏性をも有していると親鸞聖人は教えているのである。「一切の有性はみなもつて世々生々の父母兄弟なり。」と云いつた親鸞聖人の教えは、生命の尊重と、幅の広い平等愛とを自覚するための助言ともなりうるのではなからうか。

仏教の教えとは、人と人とのかわりあいの中で助け合つて生きていくことであり、生きとし生けるもの全てを尊重する気持ちを大切にすることである。真宗の教えの中心もまた同じである。争いというものは決して神のなせる業などではなく、単に自分たちの権利のために人と人が傷つけあい、殺戮しあっているだけの現象であるということとは明白の事実である。そして、これらの争いの犠牲となるのは、いつも、何の罪もない一般の人々であり、とりわけ、幼い子供たちや力の弱い婦女子たちが一番の犠牲者となっているのである。「平和とは何か」を考える時には、そこにかかわる「人間」をいかに見るかも大切なこととなるのである。当然のことながら、西洋と東洋では「人間」の見方も異なっているはずである。

西洋の人間観には、ギリシャ哲学以来の伝統的人間観と、それに対する、進化論の立場をとる、近代科学の人間観との二つの見方が存在するが、「西洋に於ける伝統的な人間観の基礎をなしてきたのは、一言で言えば、ギリシャの哲学によって築きあげられた哲学的人間観と、キリスト教によって培われた宗教的人間観とであり、その二つのものの融合統一が西洋の伝統的精神の背骨となつていった」のである。この伝統的人間観こそが、アリストテレスの言う、「人間は理性を持った動物」なのである。理性を持つことにより、動物とは異なつた存在となり、より神に近い存在として見なされるようになっていくのである。それは、言い換えれば、人間と動物は別のものであり、「理性」を

持ったという点に人間の素晴らしさを見出すのであるが、進化論の立場からすれば、人間も動物であるという点で理性を持たない、神からは遠い存在となってしまうのである。そしてさらに、キリスト教の立場からすれば、理性的動物ではない、神の創造物としての人間が争いを引き起こしているのである。

「善人なおもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかる世のひとつねにいはいく、悪人なお往生す。いかにいはんや善人をや。この条、一旦そのいわれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆゑは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむころかけたるあいだ、弥陀の本願にあらず。しかれども自力のころをひるがへして、他力をたのみまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いずれの行にても生死をはなることあるべからざるを、あわれみたまひて願をおこしたもう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみまつる悪人、もつとも往生の正因なり。よつて、善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、仰せ候ひき。」³⁾

これは、親鸞聖人の弟子、唯円が著したといわれている『歎異抄』の中の、第三章の全文であるが、親鸞聖人の教えのなかで「悪人正機説」として現在に紹介されているものである。この、「悪人正機」の中の「悪人」については様々な解釈がなされているが、社会的や道徳的解釈以上に、当時の社会事情を考慮に入れることが大切である。

親鸞聖人がお念仏の道を布教した主な相手は、暮らしの貧しい農民層や、当時の社会にあつては一步も二歩も見下げられていた身分の人たちである。鎌倉時代、下層階級の人々や農民層はもちろん、庶民のための仏教が普及するまで、仏教とは、特権階級の人々の現世利益や加持祈禱のためにのみあつたと言つても過言ではないわけであるが、支配する側と支配される側を、親鸞聖人は「善人」と「悪人」という二つに置き換えたと考えられるのである。

人間は、元来、罪深き者である。キリスト教ではこれを原罪ともいうが、親鸞聖人も同様に、人間はすべて罪ある者と考え、それらの人々を「悪人」と呼んだと考えることができるのである。『歎異抄』に於ける「悪人」とは、社会的に虐げられてきた人々であり、体制側から見た弱者なのである。そして、そのような人々にも差別なく平等に阿

弥陀仏はお救いになると親鸞聖人は説くのである。すなわち、「弥陀の本願には、老少、善悪の人をえらばれず、ただ信心を要とすべし。」⁽⁴⁾なのである。

鎌倉時代、まだまだ旧仏教会の勢力が強かった時、親鸞聖人が目指したところは、差別のない社会であり、人間解放のための念仏布教であったが、現代社会もまた、当時と何らかわることなく、世界中のいたるところで差別があり、目に見えぬ鎖につながれている人々が数多くいる。そのような人々を自由へと解放するのは、現在にあっては、親鸞聖人の教えをひきつぎながら、教育の現場にいる私たちに与えられた使命なのである。

真宗の教えを学ぶ者にとって大切な書物の一つが、先の『歎異抄』であるように、教育を志す者にとって必読の書がジャン・ジャック・ルソーの『エミール』であるが、彼は旧秩序（アンシャンレジーム）を批判し、民主主義社会、人間は平等で自由である社会を求めたことで知られているが、『エミール』の中に於いて、次のように述べているのである。

「人間は生まれながらに国王でも、貴族でも、宮廷人でも、財産家でもあるわけではない。みんなまる裸の貧しい人間として生まれてくる。みんな人生のみじめさ、悲しみ、不幸、欠乏、あらゆる種類の苦しみにさらされている。さらにみんな死ぬように運命づけられている。これはほんとうに人間にあたえられたことだ。どんな人間にもまぬがれないことだ。」⁽⁵⁾

この言葉の持つ意味を簡単に言うなれば、人間、生まれる時も、死ぬ時ただ一人であり、そこには、支配も被支配もないということであろう。人間は、本来は自由な存在なのである。しかし、時間の経過とともに、支配する側と支配される側とに分かれていくのが現実なのである。そして、支配する側といえども自由であるとは限らないのである。ルソーの言葉を借りるなら、「人間は生まれながらにして自由であるが、しかしいたるところで鉄鎖につながれている。ある者は他人の主人であると信じているが、事実を彼ら以上に奴隷である。」⁽⁶⁾ということに他ならないので

ある。

社会は不平等から成立していると言っても言い過ぎではない。そう確信しているのは私だけではないようにも思うが、親鸞聖人もまた、そう考えておられたのではなからうか。ただ、そのことを表面だつて批判することはなく、自分の胸のうちに収めながら、それでいて強い信念を持って、民衆の解放、極楽浄土への道を説き続けられたはずである。親鸞聖人が求められた仏道とは、無限の安らぎであり、お念仏の道なのである。

二 ジェンダーと親鸞聖人

最近の社会学や、国際関係学の研究の領域の中にあつて、女性についての研究を進める「ジェンダー論」が広まってきたが、女性解放を目指したのは親鸞聖人も同じである。僧侶という身分でありながら妻をめとつた聖人。彼のその行動は当時としては画期的なことであるが、むしろ破壊僧としての非難を浴びたことの方が当然といった時代でもある。もつとも、当時、妻帯していた僧は他にもたくさんいたようであるが、旧仏教界が、念仏弾圧のため、親鸞聖人をその非難の対象としたと考えられるのである。しかし、いずれにせよ、親鸞聖人が何ゆえ僧侶という身分でありながら妻帯をしたのかは、様々な解釈があるとはいへ、聖人本人にしか分り得ないことでもある。ただ、僧侶である前に、人間であるということに重きを置かれたからであることは想像のつくところである。また、幼くして母親と別れたことにも起因していると考えられるが、恵信尼を生涯の妻として大切にしていたことは、恵信尼との書簡の文面によって明らかになつてきている。さらにまた、親鸞聖人が妻帯することをよしと自分自身に言い聞かせたのは、比叡山を下りて後、参籠した六角堂での夢の中でののお告げによるものとも考えられるが、その夢のお告げとは女犯傷（によぼんげ）と呼ばれているものである。

行者宿報設女犯 (行者が宿報によって女犯しようとしたとき)

我成玉女身被犯 (私が玉のように美しい女性となつてかわり)

一生之間能莊嚴 (そして一生涯、行者の美しい飾りとなつて)

臨終引導生極樂^(?) (行者の臨終の時には極樂浄土へと導きます)

ここでいう、「我(私)」とは観世音菩薩自身を指しているが、「この言葉は自分自身の誓願でもあるので、全ての人に説き聞かせなさい」と続いているのである。観世音菩薩は大乗仏教に於ける慈悲の象徴的存在であり、優しさに満ち溢れた仏でもある。観音信仰がわが国で根強いのもそのためであろう。そして、親鸞聖人はこの夢のお告げを聞いた後、法然上人の門をくぐり、念仏の教えを学び、人々の救済のための念仏道を実践することになるのである。その後、恵信尼こそ観世音菩薩の生まれかわりとして、妻としたのではなからうか。

ところで、当時はもとより、その前の平安時代以降、女性の身分は、一部の層を除き、社会的には低い存在でもあったのである。そのような女性たちも、お念仏の力によって極樂浄土に生まれ変わり、安樂の日々が送れると親鸞聖人は説いていくのであるが、残念なことに、女性が浄土に生まれ変わるには男性に変じてからでないとできないという思想が、当時の仏教の教えとしては普遍的なものであったのである。親鸞聖人とて、この点は変えられてはいないのである。

日本における女性と仏教との関係には、明白な差別的要素が存在していたと言わざるを得ないが、法華経では、まさに、女性を「五障三従」の存在と位置づけているのである。「五障」とは、仏を守る帝釈天や梵天王と呼ばれる四天王と、仏そのものにはなれないというもので、女性のままで成仏できないとするものである。そして、「三従」とは、幼い時には親に従い、嫁いでは夫に従い、老いては子供に従えという教えであるが、いずれもインド社会にお

ける考えが、そのまま日本に入ってきたものである。常に女性は虐げられた存在であり、インドの天親（世親）が著した『往生要集』の中でも、女性は極楽浄土には往生できないと記されているのである。女性が極楽浄土に往生するために、男に生まれなければならないのである。これが変成男子へんじちゆうなんしの教えである。

真宗の葬儀に参列したことのある人は、数年前まで読経の終わりの方で次の和讃が歌われているのを聞いたことがあると思うが、その中にこの変成男子のことが述べられているのである。それは『浄土和讃』の一節でもあるが、次のような言葉である。

弥陀の大悲ふかくれば

（阿弥陀様のお慈悲が大変深ければ）

佛智の不思議をあらわして

（仏様の持つ不思議な力を發揮して）

変成男子の願をたて

（男に姿をかえさせるということで）

女人成仏ちかひたり

（女性も成仏することを約束します）

まさに、女性が男性に変わることによって浄土に成仏できるということがそのまま書かれているが、つい最近まで葬儀の際に用いられていたのである。男女平等と言いながら、現世との別れの最後に男女差別が行われていたわけである。ジェンダーの立場はもちろん、同和教育の観点からもこの部分は批判がなされたが、すべての人々が平等であることを願った浄土真宗の教えからすれば反省すべきところである。

では、日本における仏教が女性差別を行うようになったのはいつ頃の時代からであったのであろうか。古代日本を考えたとき、邪馬台国を動かしていたのは卑弥呼と呼ばれる女性であり、奈良時代にあつては女帝も少なくはないはずである。称徳天皇（在位七六四―七七〇）を最後に、江戸時代初期の明正天皇まで女帝はなく、この間に変成男子

の考えがわが国にも定着したと言えるのである。たしかに、中世期以降も尼僧は存在していたが、古代の尼僧とは身的にも性格的にも大きく異なっていたのである。前者が、時の権力と結びつき、保護もされ、身分も保証されていたが、後者は、夫などの逝去の後、出家して自宅にて冥福をいのるだけの存在だったのである。

また、女人結界という言葉が聞かれたことがあると思うが、奈良吉野の大峰山（金峯山）や大相撲の土俵も現代における女人結界である。これは、仏教や神道などと直接かかわってできたものではなく、女人不淨觀からきているものではあると考えられているが、その多くが、仏教や神道とのかかわりに於いて現在まで残っているということはいかに宗教が深くかかわってきたかということでもある。変成男子にせよ、女人結界にせよ、女性が古くから差別的扱いを受けてきたことは明らかであるが、イスラム教世界のように、今なお女性の地位が低く、束縛をされている国があることもまた事実である。

「元祖、女性は太陽であった。」こう言いきつたのは大正時代、女性解放運動に力をつくした平塚雷鳥であるが、女系社会からいつしか男性社会へと転じ、それが何世紀も続く間に日本社会にも女性蔑視の思想が根付いてしまったのである。女性が男性と同じように雇用される権利を持つという「男女雇用機会均等法」が成立したのも、まだまだ最近のことである。

封建制度が整っていた鎌倉時代、女性は家を守り、夫につくすものという考えが浸透していき、その後も、山内和豊の妻こそが理想的な女性像として捉えられていくわけであるが、親鸞聖人にあつては、決して女性を差別しようなどという気持ちはなく、むしろ救済の道を模索されていたはずである。浄土和讃の言葉だけを捉えるならば、確かに女性蔑視であると考えられるが、仏の教えすら耳にすることのできなかつた女性や貧しい人々を、お念仏によって誰もが救われると説くことが、聖人が一番望まれていたことであるはずなのである。そして、真宗の教学の基本的スタンスは、老若男女、生きとし生けるものすべてが平等であり、自由であることなのである。

三 異文化間教育の視点から

一九九三年は、世界人権宣言が出されてから四五五年目にあたり、各地で人権の大切さを訴える取り組みが積極的に行われたのであるが、この、世界人権宣言は、人類史上まれにみる惨禍を引き起こした世界戦争への深い反省から生まれたものでもある。一九四八年一月一日、パリで開かれた第3回国連総会で採択され、人権の尊重こそが、新しい世界平和を確立すると訴えたものである。

しかし、残念ながら、最近の新聞紙上を賑わしてきたのは、米軍によるイラクへの攻撃、ユダヤ・イスラエル民族闘争にインド・パキスタンの対立、ロシアに於ける小国家間の独立紛争など、血なまぐさいものばかりである。自分たちの土地を、自分たちの民族の誇りを守るため、同じ人間同士が殺戮しあい、傷つき倒れていつている。戦争というものに、人権の尊重という言葉は通用しないのである。鎌倉時代、混沌とした時代に、親鸞聖人が望まれたことが、人権の尊重にあったということはその人となりからも伺いしれるが、聖人から何百年もたった今も人権の尊重が叫ばれ続けているのである。

国際的な平和と、人権の尊重を守るための世界的な組織に、アムネスティ・インターナショナルと呼ばれているものがあるが、その日本支部が主催して、世界人権宣言の翻訳コンテストを行ったことがある。その中からの一部を紹介してみるが、私たち自身も、この宣言を読み返し、人権尊重の大切さを、自分たちの生涯を通して考える必要があるのではないだろうか。それはまた、親鸞聖人の教えを再認識することになるのではないだろうか。

第一条

君は 生まれた時から ずっと 自由なんだ。

君の家族も友達も そして 世界中の

君の知らない人や その人の家族も 友達も。

同じ人間として 同じ心の高さで

……平等に…… 生きていくんだね。

君は 生まれた時から 正しい心を持っている。

正しいことと 正しくないことを

見分ける力を 持っているんだ。

みんな仲間だもの、心と力を合わせて

その宝 みがいていこうよ。

第二条

たとえば君や 君の大切な人が

○○人だから

肌の色がちがうから

信じている神様がちがうから

考え方がちがうから

貧乏だから

身分が低いからといって いじわるされたり

ひどい時には 捕らえられたり

殺されたりしたら どうする。

許せない そんなこと。

世界中のどんな国の 誰にだって

そんなことは させないさ。

そんな目には あわせないさ。

第三条

君も 世界中の誰でもみんな

自分のいのちと 自由と

からだを守る 権利があるんだ。

(笹久美子訳)

この、世界人権宣言の口語訳はさらに続いていくわけではあるが、簡単な表現の中に、人権宣言の基本姿勢がうたわれており、世界中で、この宣言が翻訳され、実行されていくならば、本当に、素晴らしい地球となりうるはずである。しかし、現実には、このような宣言をしなければならない状況なのである。異文化間教育の基本目的は、この宣言文の内容と同じく、「思いやり」の心を持って、国際社会に貢献できるようにすることである。いくら立派な言動や行動があったとしても、それが、上辺だけのものであったとしたならば、それは、偽善でしかないのである。常に

相手の立場になって物事を考え、行動できてこそ、本当に、思いやりのある人であり、国際人と呼べるにふさわしい人ともなりうるのである。

スウェーデンの国際理解教育を推進している団体に、国際開発機構(通称SIDAシダ)とよばれている組織があるが、この組織が発行している「スウェーデンの国際理解教育」という手引書の中に、「国際理解教育は、一人一人の身近な社会での生き方が基本となり、国際理解は身近なところから始まる。砂場で一緒に遊ぶ隣近所の子供たちと、同じアパートに住む障害をもつ友達と、また、職場のフィンランド人の移民者と共に生きることから始まる。そういった関係の中で、お互いに理解しあい、思いやりを持ち、普通の、仲のよい関係になれる。そうならなければ、国際理解という言葉は、意味のないものとなってしま⁽¹⁰⁾う。」と述べられている。短い文章ながらも、たいへん含蓄のある文章でもある。「身近な社会での生き方から国際理解教育が始まる」という、この一節は、人権問題とのかかわりへの警鐘でもあり、真宗教団が世界に羽ばたくための教えでもある。

小学校の低学年期にあつては、学習指導以上に、生活面での指導が必要である。低学年期の児童は純粋であり、この時期に身につけた教えは、大きくなっても、しっかりと土台となって残っているものでもある。それだけに、生活面でのしつけはもとより、人権尊重の精神を養っておくことも、また、小学校低学年の担当教員に与えられた大事な使命なのである。小学生の子供たちにとっての身近な社会とは、家庭であり、学校でもある。その学校という社会の中から、一人一人が、相手の痛みを自分の痛みとして感じとれるような教育が施されてこそ、人権尊重の精神が養われていくのである。海外から日本を見れば、経済的にも、文化的にも豊かで、自由で、そして、平和な国である。しかし、現実の日本には、身分差別があり、国籍による差別があり、仕事の貴賤による差別がある。そして、先進国などで見受けられる、老人や婦人、病人や身障者といった社会的弱者に対する親切な態度を、日本で見かけることはまだまだ僅かでもある。はたして、これで、日本が国際国家と言えるのであろうか。経済大国という立派な呼称を世界

からは与えられてはいるが、肝心なところでは何もできていないのである。国際化を目指すことは大事なことでもあるが、それは、国内の充実があつてこそなしうるものなのである。

人権と異文化理解。一人一人が一人の「人間」として認め合い、助け合つて生きていく。そんな社会の実現をめざし、世界中の人々が、手に手を取り合つていく、それが、国際理解教育や異文化間教育の望むところであり、親鸞聖人の切実な願いなのである。

おわりに

世界が身近に感じられるようになった今、真宗の教えに生かされる者が果たす役割は、日本国内にいる一人一人はもちろんのこと、世界中の異質文化の人々とも仲良く共存しあい、理解しあつて、連帯していくことである。そして、これからの社会の変化にも対応しながら、国際社会に於いて、自らの役割と責任を果たし、世界の人々からも信頼され得る人となるための人格者を育成していかなばならないのである。それはまた、地球全体の、相手の痛みを自分の痛みとして受け取れる、全地球的、Internationalではなく、Global Educationとしての真宗の教えが広まっていくなことが期待されることである。

「異文化理解」の教育は、「人間理解」の教育であり、「人間理解」の教育は、それぞれの人が育つた「文化理解」の教育でもある。異質なるものを異質とみるのではなく、異質なるものも地球全体の文化と見た時に、共通の価値観を持つこととなるのである。親鸞聖人の教えもまた、異質なる者同士が、お互いの違いを認め合い、尊重し合い、協力し合い、共存していくことである。

私が今いる世界は、小学校に於ける教育を中心とした世界である。教育の世界に限らず、政治や経済、社会や芸術

といったあらゆる分野に於いて国際化の波が押し寄せてきている。そして、そのための教育も付け焼刃的に行われてきている。それだけに、日本の国際化が掛け声だけに終わってしまっただけではないのであるが、国際化の基本も、国文化の認識と異国文化の容認からであり、同じ人間同士として助け合っていくことである。

国民の一人一人が「地球市民」としての自覚を持ち、相互の理解を深めていくことは、現代に於ける真宗の教えの一つでもある。世界中の人々が手をつなぎ合い、共に生きていく。そういった人々を一人でも多く育てていくことが、我々、真宗の教えに生かされている者のつとめなのである。それが、親鸞聖人のいう、「一切の有性は世々生々の父母兄弟なり。」の教えを實踐していくことに他ならないのではなからうか。そして、真宗の法要などの最後に読まれる「回向句」の言葉のように、だれもが平等で、安心して極楽浄土へといくことのできる社会の到来が望まれているのである。

鎌倉時代という、武士を中心とした社会にあつて、「非僧・非俗」の精神を貫き通した親鸞聖人。様々な法難にあいながらも民衆救済に力を注いだ聖人の教えは決して古き時代の教えではなく、混沌とした二十一世紀の現在にも面々と受け継がれてきているのである。

願以此功德 願わくばこの功德をもつて

平等施一切 平等に一切に施し

同発菩提心 同じく菩提の心を発して

往生安楽国 安楽の国に往生せん

註

- (1) 「歎異抄」第五章
- (2) 「現代における人間の問題」西谷啓治著 大法輪 昭三七 八月号
- (3) 「歎異抄」第三章
- (4) 「歎異抄」第一章
- (5) 「エミール」第四編 今野一雄訳 岩波文庫 昭五三
- (6) 「社会契約論」第一章 井上幸治訳 中公文庫 昭四九
- (7) 「親鸞夢記」とか「三夢記」と呼ばれているものの一文。親鸞聖人が書いたものではないとの説もある。
- (8) 一九八五年(昭和六〇年)に成立した法律。女性の雇用が保障された反面、仕事に女性を縛り付ける口実に利用されている面もある。
- (9) 「わたしの訳・世界人権宣言」アムネスティ・インターナショナル日本編 明石書店
- (10) 「国際理解教育の現状と問題点」吉田新一郎編 国際理解教育推進研究会 昭六三